入選

祖母の「小さな親切」から考えたこと

青森県　甲東中学校　三年
中沢　優希

私は「小さな親切」という言葉を見たときに、真っ先に祖母のことを思い浮かべました。祖母はいつも優しくて、よく周囲の人たちの手伝いや手助けをしています。

祖母は、向かいの家に住む人と仲が良く、畑仕事の手伝いをしたり、自分の畑で収穫したその人が育てていない野菜をおすそわけしたり、冬にはトラクターを持っていないその人の庭と、自分の庭を早朝からトラクターを使って雪かきをしたりしています。

それらのお返しで、祖母が育てていない野菜や果物、手作りの小物などをもらっているところを、何度も見かけたことがあります。

そのとき、向かいの家の人も祖母も笑顔で、

「いつもありがとう。」

「こちらこそありがとう。」

と、お礼の言葉を交わしています。

そんな和やかな雰囲気を見ている私も、穏やかな気持ちになります。私は、祖母と向かいの家の人のやり取りから、「小さな親切」をおたがいに積み重ねていくことで、人と人のつながりは強くなることを学びました。

祖母はよく、親せきの家で行う、野菜の収穫も手伝いに行きます。特に旬が近くなると、自分の家の収穫も別で行うので、とても忙しいように見えます。それでも、軽トラに乗って手伝いをしに行きます。

ある日、トラクターの調子が悪くなってしまいました。さらに、その壊れている部品を取り寄せてからの修理になるため、手元に戻ってくるまで、数カ月はかかることもわかりました。

そのせいで、「しろかき」の時期になっても作業ができず、祖母が困っていたところ、そのことを知った親せきの人が、いつも手伝いに来てくれるからと、「しろかき」を祖母の代わりにしてくれました。

この話を母から聞いたとき、人にしてきた「小さな親切」は巡り巡って、思わぬときにより大きな親切となって自分に返ってくるのだ、と思いました。

母は仕事の都合上、帰りが遅くなる日があります。母がそろそろ返ってくる時間になると、祖母は玄関先の灯りを点けて明るくしています。そうすることで、車をとめてから玄関まで距離があっても、足元に注意して家に入ることができます。この小さな一工夫でも、母は助かっているそうです。

このことから、誰かへの気づかいは、それがどんなに小さいことでも、誰かの支えになっていることを改めて感じました。

私は、祖母の周辺の人たちに対する「小さな親切」から教わったことを忘れずに、これからも人と接していき、いつか祖母のように自然に「小さな親切」ができるようになりたい、と考えています。